

「解放される時」

文と写真 / 敷田麻実 (野生生物保護学会会長)



真冬日が十日以上続く北海道の冬はゆるくない。「ゆるくない」というのは「大変だ」という意味の北海道方言だ。確かに冬は寒い。そのため春の待ち遠しさは一際である。

本州と違い、札幌の月はまだまだ寒い。一気に冬日に戻って、雪がちらつく日さえある。札幌に赴任したばかりの昨春は、このような「冬もどり」があるたびにがっかりしたものだ。

しかしその寒さも月には緩み、広い大地にも春が訪れる。まさに春である。日ごとに緑が増え、春泥が匂っていた地面も、たちまち緑の下草に覆いつくされる。

やがてオオバナエンレイソウやクロユリが花を咲かせる頃、大地は豊かな季節を享受する。市内にライラックが咲き始めると、人の営みで街も活気に溢れる。札幌を訪れた吉井勇はこの様子をこんな歌に詠んでいる。

「家」と「リラの花咲き札幌の 人は楽しく生きてあるらう」

春には冬の停滞や閉塞感から解放される喜びがある。曇天の鬱々とした日々から、躍動に溢れる季節への期待がある。

この環境の変化は大きな刺激である。蓄積されたものが一気に解放される時に、創造が生まれるからだ。

創造は冬の閉塞の中からは生まれませんが、逆に底抜けの開放感からも生まれない。おそらく閉塞感から一気に放たれる、その解放のダイナミズムが新しい知を生み出すのだ。

長らく専門家と専門領域という「伏魔殿」に閉じこめられてきた知が放たれる時も同じ変化が起きる。老練な先達は心配するだろう、「それはおふざけではないか」と、「学問はそれほど甘くない」と。

しかし「そんなものは関係ないのだ」と啖呵を切って、知の扉を押し開ける若い世代によって未知の地平は開かれてきた。

では知の解放の後で何が起きるのか。少なくともバンドラの箱を開けたのではない。そこには新たな知の限らない創造が開けるだろう。

実際インターネットの世界では、オープンソーシングによって「実践コミュニティ」で広く共有された知から、すさまじい勢いで新たな知識が生み出されている。今までの知の創造とは比較にならない大規模な「参加」と「共創」が進んだ。

私たちがかわる野生生物の保護管理も、この知の創出方法から学ぶところが大きいのではないか。専門家の手から知を解き放つ試みは、当誌のひとことひとこの記事から始まる。

